

【旧約聖書日課】サムエル記上 1章20～28節

²⁰ハンナは身ごもり、月が満ちて男の子を産んだ。主に願って得た子供なので、その名をサムエル（その名は神）と名付けた。

²¹さて、夫エルカナが家族と共に年ごとのいけにえと自分の満願の献げ物を主にささげるために上って行こうとしたとき、²²ハンナは行こうとせず、夫に言った。「この子が乳離れしてから、一緒に主の御顔を仰ぎに行きます。そこにこの子をいつまでもとどまらせましょう。」

²³夫エルカナは妻に言った。「あなたがよいと思うようにしなさい。この子が乳離れるまで待つがよい。主がそのことを成就してくださるように。」ハンナはとどまって子に乳を与え、乳離れするまで育てた。²⁴乳離れた後、ハンナは三歳の雄牛一頭、麦粉を一エファ、ぶどう酒の革袋を一つ携え、その子を連れてシロの主の家の上って行った。この子は幼子にすぎなかったが、²⁵人々は雄牛を屠り、その子をエリのもとに連れて行った。

²⁶ハンナは言った。「祭司様、あなたは生きておられます。わたしは、ここであなたのそばに立って主に祈っていたあの女です。²⁷わたしはこの子を授かるようにと祈り、主はわたしが願ったことをかなえてくださいました。²⁸わたしは、この子を主にゆだねます。この子は生涯、主にゆだねられた者です。」

彼らはそこで主を礼拝した。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 12章1～8節

¹こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。²あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。³わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。⁴というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、⁵わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。⁶わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから、預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、⁷奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に専念しなさい。また、教える人は教えに、⁸勧める人は勧めに精を出しなさい。施しをする人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい。

【福音書日課】ルカによる福音書 2章21～40節

²¹八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。

²²さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。²³それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。²⁴また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。

²⁵そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。²⁶そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。²⁷シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。²⁸シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。

²⁹「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり

この僕を安らかに去らせてくださいます。

³⁰わたしはこの目であなたの救いを見たからです。

³¹これは万民のために整えてくださった救いで、

³²異邦人を照らす啓示の光、

あなたの民イスラエルの誉れです。」

³³父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。³⁴シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。³⁵—あなた自身も剣で心を刺し貫かれます—多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」

³⁶また、アシェル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年をとっていて、若いとき嫁いってから七年間夫と共に暮らしたが、³⁷夫に死に別れ、八十四歳になっていた。彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていたが、

³⁸そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。

³⁹親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。⁴⁰幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。

八日目の祝い

ご降誕（クリスマス）から八日目、お生まれの幼子が「イエス」と名付けられたことを記念する日から、教会は新年を歩み始めます。教会は、この記念日から始まる一年を「主の年」として数えてきたのです。

祝福を受け継ぐ

新年最初の日に、礼拝に集められて来られる皆さんの姿を目にすることができるのは、何と幸いなことでしょうか。石神井教会には「元旦礼拝」の習慣がありませんが、わたしは、物心ついたころからずっと「元旦礼拝」のある教会で歩んできました。今は、何年かに一度巡ってくる1月1日が日曜日の年を、心待ちにしているのです。

多くの日本人が新年を迎えて初詣に寺社を訪れます。同様に、多くの教会で、新年最初の日、日曜日でなくても礼拝が営まれ、多くの人が集まります。教会が「主の年」と呼んできた新しい年を、神の御前に進み出ることから始めるのです。また、そこで、神の御前に集められた者の交わりを確かめるのです。ほかのどこでもなく、まず教会の営みの中で、新年最初の挨拶を互いに交わし合うのです。

「毎週日曜日に顔を合わせている者同士なのだから、新年早々、集まらなくても良いのではないか」と考える方もあるかもしれません。確かに、年末年始は、わたしたち日本社会に生きる者にとっては今でも、家族・親族の集まる大切なときです。普段、教会生活を優先しているために疎かにしてしまっているかもしれない身内の付き合いを、年末年始ぐらいは優先しても良いようにも思います。そうしないと、普段の教会生活に差し障りがある、という方もあるでしょう。

そういう方があることも分かった上で、敢えて言うのです。そうであればこそ、年末年始に「クリスマスの12日」を祝う教会に、ご家族そろっておいでいただけるようにならないだろうか、と。

幼子イエスの家族は、まだ首も座らないであろう幼子連れて、神殿を詣でました。福音書には記されていませんが、これは誕生から40日目ごろだったと言われます。幼子と母親のために献げものをするためです。いわば「お宮参り」をしたのです。それは、この家族にとって、新しい年月を刻み始める上で大切なことであつたに違いありません。

その幼子連れ家族を、神殿で迎えた多くの人々が祝福したのでしょう。幼子を与えられて新しい歩みを始める家族は、祝福の挨拶を受けるためにこそ、迎えられるのです。福音書は、ただ、シメオンとアンナという二人のことだけを伝えています。両親は、神殿の境内に入ってきたシメオンのもとに幼子連れて行きました。抱き上げて祝福してもらうためです。アンナも、自ら近づいて来て神を賛美し、人々とこの幼子のことを語り合いました。彼らを通して、多くの人々が、この幼子とその家族をおぼえ、祝福し合い、挨拶を交わしたことでしょう。

これは、主のご降誕を祝った教会の姿なのではないでしょうか。

幼子の生涯をゆだねて

幼子のお生まれを、わたしたちは祝いました。神の御子が、わたしたちの間に宿られ、お生まれになられた。そう、わたしたちは祝いました。

幼子を迎えたのは、わたしたちです。わたしたち一人ひとりです。わたしたち教会です。ご降誕を祝った教会は、幼子を迎えて、家族となったのです。

ヨセフは、マリアを一人にはしません。マリアも、一人で幼子を抱え込んだりはしません。二人は、幼子の両親となって、幼子と共に歩む家族となったのです。

わたしたちの間で新しい命が迎えられたとき、わたしたちは、当たり前にもそのことを知るようになるでしょう。教会で洗礼によって新しいキリスト者が誕生したときにも、わたしたちは、そのことを知るようにされます。

そのようなことがわたしたちの目の前で起こっていなくても、わたしたちは、毎年必ず、主のご降誕を祝うのです。ご降誕の祝いの中に、新しい年を迎えるのです。そうして、迎えた新しい年を、わたしたちは、幼子と共にある家族として歩みます。

この幼子は、「神の御子」です。わたしたちが迎え、わたしたちが家族として共に歩む幼子は、「神の子」なのです。「神にゆだねられた子」、「主に献げられた子」なのです。

シメオンは、幼子を抱き上げて祝福しました。幼子が神の御業の為される者だと言って、自分はそのような幼子の姿を見ているのだと言って、彼は両親に告げました。まだ首も座らない、将来何者になるのかもわからない幼子の姿の中に、シメオンは、神の御業を見ていたのです。

この逸話を聞き直すたびに、わたしは思うのです。シメオンは、神殿に初めて連れて来られる幼子を抱き上げて祝福するたびに、その両親や家族に向かって、そう告げていたに違いない、と。幼子イエスだけを特別に祝福したのではない、と。それは、不謹慎でしょうか。主イエスはお生まれのときから神の子としての神々しさを放っていて、シメオンのような特別な靈感に溢れた者だけは、その真実が分かったのだ、と言うべきでしょうか。本当に、そうでしょうか。神の御子が幼子としてお生まれくださったというのは、そういうことなのでしょうか。

天使のお告げに従って「イエス」と名付けられたお方は、幼子としてお生まれになられ、わたしたちの間の一人名となられたのです。この世界が、わたしたちが、神の御業のために造られ、生かされていることを、知るようにされるためです。わたしたち自身が、互いを幼子の一人とし、神に献げられた者として、共に一つの「神の家族」として生きるようにされるためです。

ご降誕の主は、この年も、その道を先駆け歩んでくださるはずです。